2024年7月7日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私が誰であっても

［創世記25章19～26節］

「アブラハムの息子イサクの系図は次のとおりである。アブラハムにはイサクが生まれた。イサクは、リベカと結婚したとき四十歳であった。リベカは、パダン・アラムのアラム人ベトエルの娘で、アラム人ラバンの妹であった。イサクは、妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った。その祈りは主に聞き入れられ、妻リベカは身ごもった。ところが、胎内で子供たちが押し合うので、リベカは、「これでは、わたしはどうなるのでしょう」と言って、主の御心を尋ねるために出かけた。主は彼女に言われた。「二つの国民があなたの胎内に宿っており二つの民があなたの腹の内で分かれ争っている。一つの民が他の民より強くなり兄が弟に仕えるようになる。」

月が満ちて出産の時が来ると、胎内にはまさしく双子がいた。先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。その後で弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケブ）をつかんでいたので、ヤコブと名付けた。リベカが二人を産んだとき、イサクは六十歳であった。」

[1] スケールの大きな世界のこと

 今日から旧約聖書の「創世記」の中の、ヤコブの生涯、またその後にヨセフの生涯をご一緒に見て参ります。物語の記事ですから、あまり理屈っぽい所はありません。むしろ「大河ドラマ」のような人間臭さを感じさせるような聖書箇所だと思います。今日の箇所も、ヤコブ物語の導入のような部分であり、取り立てて神学的にと言いますか、込み入ったお話するつもりはありません。ただ、今日の所、決してバカバカしいとは思えない、スケールの大きな世界のことを告げているのではないかなと思いました。それは、私たちの命の始まりと、それを導く方の物語ではないかと思ったのです。

[2] 行き詰まりは、神様につながる道

　神様は、アブラハムの息子イサクと妻リベカの間に20年間子供をお与えになりませんでした。20年間ですよ。神様はアブラハムに「あなたの子孫は天の星のようになる」と語りましたが、息子イサクもこれでは話が違うではないかと思ったこともあったに違いありません。しかし今日の所を読んでみますと、イサクとリベカは本当に祈りへと導かれていますね。「イサクは、妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った。その祈りは主に聞き入れられ、妻リベカは身ごもった」とあります。そうです。子供というのは、モノではありません。「命」です。そして、その命の与え主がいる。その方にイサクは本当に心を注ぎ出して祈った。その行為自体、「命」は自分の手の内にはないということを表していることではないでしょうか。そして、リベカも年を重ねていく訳です。命を宿す当事者はむしろリベカの方です。リベカの辛い気持ちも深かったと思います。しかし、イサクは「妻（リベカ）のために主に祈った」（21節）と書いてあります。これは素晴らしいと思います。その祈りを主は聞き入れられました。胎の実が与えられる。ところがです、22節。「ところが、胎内で子供たちが押し合うので、リベカは、「これでは、わたしはどうなるのでしょう」と言って、主の御心を尋ねるために出かけた。主は彼女に言われた。「二つの国民があなたの胎内に宿っており二つの民があなたの腹の内で分かれ争っている。一つの民が他の民より強くなり兄が弟に仕えるようになる」とあります。

　何と、リベカに与えられた胎の実は、二つの実、双子でした。時に神様は人間の予想を超えたことをなさいますね。やはり命は神様から来るのですね。そして、この双子はとてもよく動くので、リベカはちょっと恐くなってしまったようです。「これでは、わたしはどうなるのでしょう」と思って、主の御心を尋ねるために祈りに行ったというのです。神様に聞く心を持っている夫婦であるし、またそうせざるを得ない所に神様が導かれたということも出来ると思います。ある意味の行き詰まり。それは神様につながる道とも言えるのだと思います。

[3] 「個性」と「共感性」と

　ところで、皆さんの中で、双子の方はいらっしゃいますか？

私自身はそうではなく、三歳下には妹がおりました。多少年齢の差があったり、性別も違うので、幼い頃、一緒にじゃれて遊んだ覚えというのは殆どないのです。ちょっと寂しい位です。しかし双子というのは、お互いが幼い頃から遊び相手になるみたいですね。変な階層のようなものが初めから無いと言いますか。そして、外見はよく似ていることが多い。また、似ているけれども、個性はそれぞれ異なるものを持っている。双子ちゃんというのは、傍から見ていると、ピーナッツみたいで可愛い！と言ってしまいがちすけれども、そのように同質化して見られる、扱われるという事については、きっと「わたしはわたしです！」と言いたくなる気持ちがあるのではないでしょうかね。その意味で、聖書が双子の子の誕生とそれにまつわるドラマを記してくれているというのは、とても貴重だなと思ってしまいます。またこのようなことがよく言われるようですが、双子同士は、まるで鏡のように、どちらかがいじめられたりすると、自分がいじめられたりするような痛みを感じるというような、共感性が強いという側面も持ち合わせているようです。聖書は「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」と言いますが、他者の心を心とするという「共感性」、それは、私たちは皆双子のような存在であるという認識に立てればいいのかもしれませんね。その意味でも聖書がこのエサウとヤコブ誕生の記事を記してくれているのは大きいと思います。

[4] 比較と競争社会の中に生きる私たちに

そして更にこの物語が私たちに突きつけるのは、私たちは皆、愛すべき罪人だという事ではないかと思います。来週以降これから少し詳しくエサウのこともヤコブのことも見ていくことになりますが、どちらもダメな部分を持っていますね。聖書は赤裸々です。その始まりが、リベカの胎の中でもう既に押し合っている訳ですよね。俺が俺が、と比較し合って、小競り合いしていると言いますか。そして、それをリベカのお腹は包んでいる訳です。小競り合いをしている二人を、羊水、それを神様が与えられた水と言ってもいいかもしれませんが、それが二人を包んで生かしている。ここに、私は命の不思議と温かさがあるな、と思いました。これからヤコブにもエサウにもいろんなことが起こります。けれども、出発点はここ。誰であっても、どんな存在であっても、出発点はここ。神様がそのご意志を持って始められた命、そして守っていて下さっている命です。更に、その最終地点はどこでしょうか？―イエス様の十字架です。弱く不完全で、誰かを踏み台にしながら生きるような罪深い私たちです。本当にそうです。もし私たちが多少なりとも豊かであるということは、その分犠牲を払わされている人たちがいるからです。自分が安全地帯にあるのは、誰かが辛い生活を強いられているからだと、そういう痛みを感じる心を私たちは置き去りにしてしまいます。その行き付く先が、神を殺してしまった十字架です。そしてその十字架は、また、罪人である私たちを無言で包み、語りかけ、造り変える十字架ではないでしょうか？

エサウもヤコブも、それぞれの親の依怙贔屓もあったりして、いつしか比較の世界の中で、競争世界の中で生きるようになってしまいました。他人事ではありませんね。でも、だからこそ、覚えておきたいのです。私たちの命の源は神にあるということ、そしてそのゴールは十字架にあるということを。お祈り致します。

主なる神様、命の不思議さ、尊さを覚えます。私たちの本当の命は、あなたの中に隠されているのだと思います。そして、あなたは、私たちがどのような存在であっても、私たちを造って下さったお方として、責任を取り、導いて下さいます。いつも自分の身の回りのことだけで汲々としてしまっている惨めも者をお赦し下さい。これから主の晩餐式にも与ります。「ひとり」のようでいて、実は双子、いや本当に多くの兄弟たちと共に頂く主の十字架の記念であることを思いつつ与らせて下さい。7月に入りました。お一人おひとりの霊肉をお護り下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。